

特色ある日本の学校

松浦 三郎（一般社団法人学習評価研究所）

1 はじめに

2 一燈園の教育実践から

- ① 「いのちとところ」小学校1年年生の質問
- ② 人権学習（長島愛生園・中学3年生）
- ③ 年頭行願（長浜市・高校2年生）
- ④ 夏期学校（一燈園・中学1年生～高校3年生）

3 分科会参加者の感想（アンケートから）

4 おわりに

1 はじめに

カズオ・イングロは著書「わたしを離さないで」で、クローン人間を育てる寄宿制学校の生活を描いた。クローン技術の発展によって、とうとう自分のコピーを人工的に作り出すことができる時代に入ってしまった。私たちは「生命とは何か」という問いをめぐって長く論争し続けてきたが、科学技術の革新的進歩はこの論争を一気に飛び越えた。75年程前、人間の自由と生きる権利を奪われ、今では考えられない形で生涯を終えた人が大勢いた。長野県上田市の無言館に夭折画家の絵画が展示されている。戦地に向かう前のわずかな時間を惜しんで、彼らは絵筆を取った。愛する妻を、ほほ笑む母を描いた。あの時代、学校や教師はどんな役割を担ったのだろうか。未来予測が難しい時代だと言われる一方で、経済界を中心に「人材育成」の必要性が声高に叫ばれている。学校は「人材育成」の場なのか。あるいは教育基本法にうたわれている「教育」の場なのか、改めて考える必要があるのではないか。この分科会では、日本一小さな私立学校一燈園の教育実践を紹介しながら、「教育とは何か」「教師とは何か」について、参加者のみなさんと一緒に考える時間にしたい。

* 一燈園（京都市山科区：小中高全生徒数 105 名（2019 年 11 月）、65 年間の高校卒業生数は 350 名）

2 ①「いのちとところ」

以下は相大二郎氏の経験したあるエピソードである。

2013 年 2 月のことである。小学校 1 年担任の先生から「あまねちゃんからお手紙です」と一通の白い封筒を手渡された。封筒の表には「大じろうさんへ」と書かれていた。

大じろうさんへ

こころと

いのちは

なにが

ちがうんですか
おしえてください。
1ねん あまねより

自分(相大二郎)はこの唐突な手紙を何度も読み返しながら大きな感動に包まれていた。そして以下の三つのことに気づいた。一つは6歳の女の子が既に「いのち」と「こころ」の違いについて、何か疑問を抱えているということである。二つめはその疑問を頭で思うだけでなく、自分で手紙に認めて先生に手渡すという行動性についてである。そして三つめは手紙の文字の配列に工夫があり、変化と美しさがあるということである。この6歳の娘の真摯な問いかけに対して、自分は80年も生きてきたのに、彼女を納得させる答が見つからないことに気づかされた。「知識」や「技術」には答があるから教えることができる。しかし「いのち」や「こころ」には答がない。しかしまた答がないということは同時に無数にあるということでもある。つまり一人ひとりが自分自身の答えを見つけなければ「いのち」や「こころ」の答を掴んだことにはならない。それは「いのち」や「こころ」は「知識」や「技術」とは全く異なった次元の課題だからだ。小学1年生の手紙から自分はようやくこのあたりをうろついていることに気づかされた。

2018年の卒業式は感動的な式典だった。大二郎さんとあまねちゃんが自ら6年間の悩みを寄り添うように告白した。小学6年生の樋口あまねちゃんは卒業式の答辞で以下のように述べた。私がこの一燈園小学校でずっと考えてきたことが二つあります。一つは、私が1年生の時、大二郎さんに「命と心はどこが違うのですか」と質問したことです。朝ご飯の時に生まれた一つのなぞ。大二郎さんは礼堂でことあるごとにそのお話をしてくださいました。低学年の時は全く分かりませんでした。だんだんと深く考えられるようになり、卒業を前に私はこう考えました。「命」は私たちを生かすものであり、「心」は生きるために必要な考えや感情を創り出すものであるということ。二つ目は、大二郎さんの「私はなぜここにいるのか」という言葉です。なぜ自分がここにいるのか、なぜ自分が女で生まれてきたのか、毎日のように考えました。そして、私は目に見えないもの選ばれた唯一無二の存在なのだと思います。

*文中の大二郎さんとは一燈園学園長相大二郎氏のことです。

2 ② 人権学習 (長島愛生園<国立ハンセン病療養所>中学3年生・6月)

人権学習は一燈園中学校の修学旅行でもある。愛生園での現地調査を経て、夏期学校の講座担当者として、彼らは全教職員&生徒を対象に「人権学習」について発表する。

一燈園中学校人権学習旅行の生徒たちに交じって、2009年6月に私は初めて長島愛生園に足を運んだ。歴史館学芸員田村朋久さんの案内で園内見学に同行した。年間3,000人を越す見学者の中に、多くの中学高校生がいるが、田村さんは一燈園の生徒との出会いは特別だという。午後、田端明さん(仮名・2016年10月4日死去98歳)の自宅を訪問し話をうかがった。21歳で愛生園に入所、26歳で失明し自殺を思い立つ。深夜、波の音を頼りに

教会裏手の断崖にたどり着く。故郷の風景が走馬灯のように駆け巡る。木々を揺らす風に、死ぬんじゃない！という母の叫び声を聞いたという。それは12歳で死別した母の声だ。差別撤廃に向けて京都の集会に出かけたことがあった。どの宿からもみな宿泊を拒まれ困り果てていた時、一燈園が受け入れてくれた。風呂にも入れてもらえた。うれしかった。一燈園の生徒がこの島を毎年訪問してくれる。若者らしくはつらつとした姿に出会い、彼らの息づかいを身近に聴くと心が弾んでくる。それは田端さんが生徒たちの中に自分を見出しているのではないか。彼は自分が貯金したまま一生引きだせそうにないその自由、その可能性を生徒の名義に書き換えているのではないか。田端さんは全盲だが、我々の仕草や息づかいまでも見えているようだ。正座などせずにくつろいでください。口元から流れるよだれを不自由な手の甲で拭きながら声を絞るように話した。1時間も経っただろうか。何か質問があればどうぞ。生徒たちに声をかけた。A君が訊ねた。田端さんはこれからどんな人生を送りたいですか。差別や偏見の中に失望と悲しみを背負わされてきた田端さんはどう反応するのだろうか。間を取って田端さんが静かに口を開いた。人間として生まれてきてよかった。そう思えるようにこれからも精進していきたい。そして田端さんが中学生に託した言葉があった。ハンセン病という病気はこの国からはなくなった。しかし世の中には多くの偏見や差別がある。どうかこの問題に正面から向き合ってほしい。

2 ③ 年頭行願(長浜市, 高校2年生・1月)

相大二郎さんは年頭行願について以下のように述べている。年頭行願は一燈園高等学校の修学旅行でもある。長浜市内の民家を訪ね歩きお願いし、トイレ掃除をさせてもらう。この体験は、一燈園の高校生でなければおそらく出会う機会はないだろう。一月初旬の雪の舞う季節、見知らぬ町の見知らぬ家を一軒一軒訪ねて回り、五軒十軒と断られ続け、ようやく「ご苦労さんです、どうぞ」といわれた時、生徒たちはトイレに飛んでゆく。そして白い便器を磨きながら「一体自分はなぜトイレを掃除させてもらってうれしいのか」という新たな自己発見に気づく。躊躇しながらも真面目に年頭行願に挑戦する高校生たちを、私は誇りに思う。一燈園の学校で何を学んだのか。一燈園の学校で何を体験したのか。20年、30年後、彼らは何らかの壁にぶつかった時、この体験は必ず心のよりどころになるに違いないことを確信している。

また年頭行願に参加した生徒は次のような感想を寄せている。二泊三日の行願を終えて、今こうして思うとあっという間でした。けれども、その中で得たものは忘れることはないと思います。初日は、前日までの天候とはうってかわって横なぐりの吹雪でした。草履になれていない素足が痛かったし、その先何が起こるのかわからないという不安感や緊張感を抱いていました。けれども迷いや不安感を消し、意を決してみると不思議と肌に触れる雪の寒さが和らいだ感じがしました。クヨクヨしてはだめだと思い、これが自分との挑戦だと思うことにしました。自分と正面から向き合うことができたのは、やはり初日の個別行願でした。回りには誰もいないし頼るものは自分だけ、何度か断られていくうちに、急に不安感に襲われて逃げ出したいくなりました。しかしここまでできたのだから頑張ってみよ

うと思い、再度足を進めました。その時、一軒ご縁ができました。本当にうれしくて、どう表現してよいかわかりませんでした。けれど不思議なことに、させてくださった相手も私に感謝してくれているのです。私は実際うれしかったので自分が感謝する気持ちはよくわかります。でもなぜ、あちらも同じ思いをするのでしょうか。私は心に熱いものを感じると同時に、このことは日頃人間が忘れかけているとても大切なものではないかと思いました。行願はただのトイレ掃除ではありません。自分の発見や他人とのふれ合いがあり、厳しい中にも計り知れない喜びもあります。このことを日常の中でも、一人ひとりが感じることに気づいたら、自分は少しでも成長していけるように思います。

2 ④ 夏期学校(一燈園・中学生&高校生・7月)

この夏期学校は講師にとっても、生徒にとっても、自らの可能性への挑戦の場であり、自分探しの場でもある。また授業奉仕によって創りだされる新しい学習環境の実験舞台でもある。2019年で、この夏期学校は13回目となる。

2006年師走、東京新橋駅前のカフェで二人は熱く語り合っていた。開成学園橋本弘正さんと一燈園相大二郎さんは限られた成功事例を小さな学校社会の中に閉じるのではなく、組織も自らも開放し、他校の仲間と情報を共有し、互いに学び育っていく機会が必要だと考えていた。東京大学合格者数日本一の開成と人間教育に熱心な日本一小さな一燈園が夏期学校を企画している。なんとも不思議なコラボレーションだ。2007年8月28日付京都新聞朝刊「進学校教師が夏期学校」、同8月28日付産経新聞朝刊「真の知恵をつかんで」、そして8月29日付朝日新聞夕刊「教育の姿を問い直す」という見出しで、一燈園夏期学校の活動内容を掲載した。25名の講師が手弁当で授業奉仕に集い、「学習」「汗」「祈り」を教育理念とする一燈園教育の中に身を置き、一人の教師として、自らに向き合った2日間を紹介された。この10年間で延べ224名の講師が授業奉仕に参加した。この授業奉仕活動は島根、福島、北海道等各地域に広がり根づいている。特に2011年3月11日東日本大震災以後、福島県立相馬高校を中心に、県内各地の授業奉仕活動に参加した講師数は延べ88名、協力者は42名、受講生徒数は8,090名に上った。

2019年、この夏期学校に参加したM氏は次のような感想を寄せている。一燈園の生徒たちと少しの間ですが、関わらせて頂き感じたことは、素直さと柔らかさを持った生徒が多いということでした。外部の人間である私にも身構えることなく、授業においても積極的に話を聴き、問いにも答える素直さがまず印象的でした。しかし、それ以上に感心したのが、多くの生徒が、その場、その場の状況と与えられている立場に応じて柔軟にコミュニケーションを行い、行動をしているということでした。授業中に積極的な発言をする生徒がいる一方で、多学年混成なので小学生が高校生の中に混じって発言するのは難しいだろうと思いきや、きちんと自分の言葉で回答するというだけでなく、回答に偏りがあつたり、他の回答を求めている意思を示せば誰かがそれに応えてくれる。実に相手を良く見てコミュニケーションをおこなっていると感じました。なぜ、そうした柔らかさが身につくのか。いつも多学年で関わっているから慣れているという部分も理由の一つかも知れませんが、

私は彼らの姿からは、攻撃性のある相手を押しのけるような強い我を全く感じなかったという点にすべてが集約されている気がする。要するに人間教育が結果として彼らの判断基準に影響を与え、そうした行動に表れているということだと思うのです。

3 分科会参加者の感想(アンケートから)

・一燈園という学校を通じて、今の自分にたりないもの、経験したことがないものが、まだまだたくさんあるのだと感じました。いわゆる一般的な学校では得られないことを体験できるのは良い意味でうらやましく思えた。・あまねちゃんの質問と答えは、深く心に刻まれました(とても考えさせられました)。また大二郎さんの「拝育」(子どもたちの光を拝んで育てる)という考え方にもぐっときました。・とても勉強になりました。原点に戻ることができました。ありがとうございました。・自分の教育に対する考え方に大きな影響を与えるとてもステキな内容でした。・娘の通った私立学校にも自らの気づきをうながす仕掛けがあり、一燈園の話に重ね合わせて聞いていました。・新しい知見を得ました。たいへんありがとうございました。・「この教育改革で誰が儲かるか」短い言葉ですが、非常に分かりやすかった。ただ前置きが長かったと思います。・教育課程特例校として、一燈園の学習内容は理解できるが、本学の学生の多くは公立の小・中・高・特別支援学校に勤務する。そうした学生に、今日の話の中で何を伝えたかったのか。その部分をもう少し具体的に分かりやすいものとして伝えていただきたい。また教育行政の立場から考えれば、一定の業務は民間にアウトソーシングをしていかなければならない。ベネッセも英検(公益財団法人日本英語検定協会)もそれだけの能力と安定した仕事ができる企業だから選定された業者であり、一方的に「金儲け」という視点で見るとはいかがなものかと考える。・一燈園の教育には関心がありましたので、大いに刺激を受けました。一燈園の教育の質を Educational Measurement の観点から、どのように行うのか。それは評価を越えるものなのではないかと思えます。・ある学園の人権教育について理解を深めることができました。愛生園の話はとても印象に残りました。・あまねちゃんはまだ小学校1年生でした。「命と心はどこが違うのですか」と質問したのです。そして6年間考え続けたのです。すごいなと思いました。・「特色ある日本の学校」現在おかれている子どもたちの問題、学校の問題、社会の問題の重大さに驚きと恐ろしさを感じました。教育において何を守っていかなければならないのかを考えさせられました。ほんとうによい分科会に出席できました事有難く思います。・今までと全く違う視点の話聞くことができたので良い刺激になりました。

*なお、アンケートの文字の判読が難しいものは割愛させていただきました。

4 おわりに

人間らしく、自分らしく、どう生きるのか。学校には自分探しの時間がある。仲間との出会いや学びを通して、心地よい感動がそこにある。人類が700万年に渡る進化の過程で手に入れた最も大きな力は、相手の気持ちに立って物事を押し量る共感力だという。みなさんの勇気ある行動によって、子どもたちの未来に希望の光を投げかけてほしいと願って

います。この分科会に参加して下さったみなさんのアンケートを読ませていただき、多くの気づきを得ることができました。改めて感謝申し上げます。

□参考資料

- ・『瀬戸の潮鳴り』松田範祐著 文芸社
- ・『石菫の花咲く』田端明著 法藏館
- ・『わたしを離さないで』カズオ・イシグロ著 ハヤカワ epi 文庫
- ・『科学季評・弱まる科学への信頼・山極寿一』朝日新聞 2018 年 11 月 10 日朝刊
- ・「燈影通信」2015 年 4 月号（相大二郎）
- ・「燈影通信」2018 年 4 月号（樋口あまね）
- ・「燈影通信」2016 年 2 月号（相大二郎）
- ・「第十三回一燈園夏期学校報告集」
- ・「第十二回一燈園夏期学校報告集」
- ・「第十一回一燈園夏期学校報告集」
- ・『EdTech が変える教育の未来』佐藤昌宏著 インプレス
- ・『ルポ貧困大国アメリカ』堤未果著 岩波新書
- ・『新島襄全集』第一巻「同志社大学設立の旨意」
- ・『いのちって何』相大二郎著 PHP 出版